

日本文化と禅

禅とわが国本来の詩歌（二）

……………堀井 妙泉

私の歩んできた道

……………斎藤 是心

茶道 肥後古流について

……………中村 慈光

山と俳句（四） やぶ山の思い出

……………井本 光蓮

人間禅の書（二） 釈宗活老師の書

……………藤井 紹滴



禅とわが国本来の詩歌（二）

堀井 妙泉

三 人心の中の真文章、真音楽（『菜根譚』より）

このたび、総裁老師の『居士禅者の修行と悲願』という法話を拝読しました。趣味と修行のところ、耕雲庵老大師のお言葉を明記しておられ「宗教の根源、禅は文字で表したり、言葉で説明したりすることは出来ないもの、しかし詩や短歌や俳句では、単なる言葉や文字に止まらず『言外の意味』を味わうことが出来る。そういう詩歌では、禅の境地に限りなく近づくことが出来、禅の境地を味わうことが出来る。したがって日頃からこういう詩歌を趣味とすると、日常生活を禅的に味わうことが出来、これは禅による人間形成の境涯を磨くことにつながる。」と述べておられ、大変励まされ、自信を得たことであります。

禅の境地を詩歌に表現し、味わうことは難しいことですが、少しでも近づくことができるよう研鑽し、工夫していきたいと思います。

中国、明の時代に洪自誠という人によって書かれたと伝えられている『菜根譚』という書があります。この著者の書かれた明の時代は、ちょうど現代に似て、繁栄と不安、安定と変化の錯綜した時代でありました。中国三千年の歴史の中で、生き続けてきた儒教と道教をミックスし、それに仏教の智慧を加えた中国文化人の練り上げた処世術、人生の極意書というべき書であります。

その『菜根譚』の前(57)に次のような味わい深い一節があります。

【人心に一部の真文章あり、^{すべ}都て残編断簡に封緘^{ほうこ}し^{あわ}らる。一部の真鼓吹^{こすい}あり、^{ようかえんぶ}都て妖歌艶舞^{いんぼつ}に湮没^{すべから}し^{らる}。学者須^{すべから}く外物を掃除し、直に本来^{もと}を覓^{わづか}むべし。纔に個の真受用あらむ。】

人の心の中には、一冊の真文章が本来備わっている。この真文章さえ読破すれば、何も他に文章は読む必要がないのだが、惜しいかな、この真文章は、古人の糟粕^{そうはく}たる残編断簡のために封じ込められている。

また、人の心には一曲の真音楽が本来備わっている。この音楽をさえ聞き分けたならば、何も他に音楽を聞く必要はないのであるが、惜しいかな、これも妖歌艶舞^{いんぼつ}のために湮没^{すべから}されている。学者たる者は外物のために誘惑されることなく、これを払い除き、本来具有の真文章、真音楽^{もと}を覓^{わづか}めることが先決である。かくして初めて、真文章、真音楽の妙趣を受用することができるということでもあります。

「残編断簡」とは、古書のこと、むかしまだ紙や筆のなかった時代に、竹を編み紙となし、それに漆^{うるし}で文字を書いたもの、それを「編」と言い、「簡」と言ったものであります。「封緘」は閉じ込めること、「鼓吹」は鼓歌吹奏すること、音楽のこと、「妖歌艶舞^{つや}」は艶やかで美しい歌舞、「湮没」は埋没と同じであります。

真文章、真音楽の妙趣を受用するとは、どのようなことなのでしょうか。

天地の大道、すなわち宇宙の真理は、言語道断なものであり、文字の到底尽くすところではないが、雑念妄想の塵^{ちり}を払い尽くし、心を空にして、天地天象を眺めてみると、見るもの^{ことごと}悉く天地の文章、天然の音楽であります。

古人も「古松^{はんにや}般若を談じ、幽鳥真如^{るう}を弄す」と吟じております。般若は智慧、幽鳥は高山帯にすむ鳥のことですが、古松も幽鳥も大自然と溶け合って、自由自在の境地を楽しんでおります。

このように智慧を磨き、一点の曇りもないまことの心で【天地と我

と同根、万物と我と一体】となったところから見ると、林の上を過ぎる風音も、谷川の石上を走る水の音も、天然自然の音楽であり、狩田の上で藁^{わら}を焼く煙の色も、石狩川の水面^{わた}を渉る月影も、厳冬に咲く樹氷^{はな}の華も、これみな最上の文章であります。

四 大自然から学ぶもの

ここで、私の最近の歌を二首ほど披講^{ひこう}させていただきたいと思いません。

乾坤^{けんこん}に汝^なが泣き声のあるばかり茶碗^{ちawan}の縁^{ふち}の
えんまこほろぎ

ある秋のひと日、お茶事が一通り終わり、来客もお帰りになって、ほっと安らいでいた時に出合った光景ですが、この蟋蟀^{こおるぎ}は黒い小さなからだ全体^{みなぎ}を漲らせ、なくという一事に一心不乱で、尽十方法界から尽未来際まで、ころころころと正念だけが、少しの切れ目もなく生き活きと、一貫相続しております。人間である私には、時々雑念妄想が入り、この蟋蟀のように純粹に正念相続ができているだろうかと、反省しつつ詠^{うた}ったものであります。

天と地の相聞いかに熱からむ一夜に樹氷の
華を咲かする

これは、真冬の早朝に石狩川の辺り^{ほと}を車で通った時、ちょうど日輪が昇りはじめて、川原柳にたわわに咲いた樹氷が七色に輝き、人智の及ばない造形^{さうけい}の美しさと、大自然の荘嚴に息を呑むばかりでした。

天地の運行は、見たところ寂然として少しも動いていないようですが、その活動は整然として狂いもなく、「天行健なり」であります。

朝、太陽が東から出ると、夕べには西に沈み、月輪が現れる。日・月は実に昼夜駆け通して少しもじっとしていませんが、光明は千古、万古変わりなく注がれ、天地宇宙のはからいは、まさに大いなる父母の愛に外ならないと実感したのであります。

「^{そうもん}相聞」という言葉は、ふつうは男女の愛のことを言いますが、ここでは大いなる父母の愛として、天と地の激しい消息の通い合うことを表現したものです。

次は、私が現在所属している『潮音』という短歌の結社（鎌倉にあります。）の創始者であり『新壑』の小田観蛸師の先生でもある、太田水穂師の歌を一首だけ紹介して終わりたいと思います。

太田水穂師は、釈宗活老師と親交が篤^{あつ}かったと聞いておりますが、ながい間芭蕉の^{ふえき}不易流行の作風を研究された、余情のふかい象徴主義を^{ぼう}標榜された作家でありました。

^{はくおう}
白王の牡丹の花の底ひより湧きあがりくる
潮の音きこゆ 太田水穂

これは昭和15年頃の作品であります。いま道場の庭にも、^{ぼたん}牡丹があでやかに咲いておりますが、牡丹の原産地は中国で、千年の昔から、彼の国の人々に愛玩され「天下の真花は独り牡丹のみ」と詩人の^{おうよう}欧陽脩^{しゅう}という人も言っていますが、日本の短歌の上では、万葉集にも、古今集、新古今集にも取り上げられておらず、「ぼたん」という漢音を嫌ったのか「ふかみぐさ」として、わずかに二首残っているだけです。近世になってから段々に親しまれてきたようです。

この歌は、芭蕉の言っていた「ものが見えたる光いまだ心に消えざるうちに言ひとむべし。」という直観の^{ひらめ}閃きのままに把握されたもので、牡丹の花の美しい外見だけをみるのではなく、花の底ひより湧き

上がってくる大自然の鼓動を生き活きと捉とらえています。今、あでやかに咲いている花は一週間もしたら散っていくでしょう。しかし、花の奥に鳴り響いている潮の音は、地球がある限り永遠不滅なもの、相対的なものではなく、一切の世の騒音の届かないところ、時代の流れや社会の変化、栄枯盛衰、生死の中で、一貫して変わることのない不易なものを意味し、花は無常なるものを表現していると思うのであります。

以上で歌の紹介は終わりますが、私には今目標としているささやかな夢があります。

それは、著しゃくご語の真意を短歌に捉えて、分かりやすく表現することに挑戦してみたいという夢です。

まだまだ禅においても、歌においても未熟者であり、私の背後には忍びやかに老いが迫っていますが、老いと手を携えて、更に研鑽し、日本文化の底荷としての誇りを養うとともに、次の世代を担う若い人達に、底荷なるものを理解してもらえるように努めてゆきたいと希こいねがっている次第であります。

ご清聴ありがとうございました。

(完)

(平成20年5月1日、春季教団撰心会の法話より)

著者プロフィール



堀井妙泉（本名 / 美鶴）

昭和3年、函館市生まれ。歌人。新墾賞、北海道歌人会賞、北海道新聞短歌賞、日本歌人クラブ北海道ブロック賞受賞。平成2年より同人歌誌『英』編集発行人を務める。昭和44年、人間禅芳賀洞然老師に入門。現在、人間禅特任布教師。庵号 / 蓮 昌庵。